

令和元年度福岡市民芸術祭・「beyond2020プログラム」参加事業

筑前琵琶保存会 第55回演奏会

# 紅白源平琵琶合戦



令和元年10月5日(土) 13:00開場  
13:30開演

大濠公園能楽堂 福岡市中央区大濠公園1-5  
☎092-715-2155

入場料：前売 2,000円／当日 2,500円

※ご来場状況により整理券を発行する場合があります

[チケット取扱]

◎チケットぴあ (Pコード 158213)

◎チケットポート 福岡パルコ店 (福岡PARCO本館5階)

☎092-235-7223 (平日10:00~18:00)

◎スーパーチケット 地下鉄博多口店 (地下鉄博多駅博多口構内)

☎092-432-8766 (平日7:00~20:00、日・祝9:00~19:00)

  
beyond  
2020

主催：筑前琵琶保存会

後援：福岡県・福岡市・福岡市教育委員会

(公財) 福岡市文化芸術振興財団・福岡文化連盟

お問い合わせ：☎092-474-2973 (筑前琵琶保存会・青山)

## 【第一部】

### 一 祇園精舎

詞「平家物語」より 作曲 青山旭子

演奏 末永恭子

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。「平家物語」の冒頭、栄華を極めた平氏の滅亡と現世の人の世の儚さを琵琶で奏でる。

### 二 大原御幸

詞「平家物語」より 作曲 寺田蝶美

演奏 浜本 青宇

壇ノ浦の合戦に敗れ、入水した建礼門院であったが捕えられ京へ送られる。その後出家した建礼門院は、平家一門の菩提を弔うために大原の寂光院へ移り住む。山裾の人里離れた庵で侘しく日々を送っていた折、後白河法皇が訪れた。

### 三 清盛嚴島詣で

作詞・作曲 木村嶺魔 編曲 青山旭子

演奏 木村嶺魔

保元・平治の乱で源氏に勝利した平清盛は、日宋貿易によって国の繁栄を図った。その為、神戸や博多に港を造り、難所であった音戸の瀬戸を掘削して瀬戸内航路を整備したのであった。今宵、嚴島神社に参詣した清盛一行は、海の安全を祈念しつつ、都のはやり歌を舞う白拍子の奉納舞を堪能した。

### 四 常磐都落

作詞・作曲 寺田蝶美

演奏 伊賀 敦子

源義朝が平治の乱にて敗死したとの知らせを受け、常磐は今若、乙若、牛若の幼き子供達を連れて密かに都を離れることにした。雪が降り寒さ厳しき道中、常磐の胸に抱かれていた赤子がのちの源義経である。

### 五 箏音小督

作詞・作曲 寺田蝶美

演奏 高倉 青香

平清盛の怒りを恐れた小督は高倉帝に何も告げず御所を退いた。悲しむ帝に仕える仲国は、噂をたよりに夜の嵯峨の野辺へ小督を探しに向かった。聞こえてきた箏の音はまさしく小督の爪音。小督が出家を考えていることを知り仲国は急ぎ帝へ知らせに戻る。

### 六 橋合戦

詞「平家物語」より 原曲 浜本 青宇

編曲 青山旭子

演奏 山中 和子

平家物語巻第四で初めて描かれる合戦の場面。園城寺から以仁王を連れて逃げて来た源頼政は、宇治橋で橋板を落とし平家軍を待ち構える。当時の戦は関の声を合わせることから始まる。さて戦いはいかに。

### 七 俱利伽羅峠

作詞・作曲 寺田蝶美

演奏 寺田蝶美

源義仲（木曾義仲）は平家の大軍に挑むため策を立てる。寿永2年5月11日、夜を待って義仲らは本手搦手各所から一斉に関の声を上げ平家軍へと攻め込んだ。驚いた平家軍は暗闇の中で行き場を失い混乱し俱利伽羅峠より次々と落ちていった。人も馬も地獄谷に折り重なる様は見るとも無残、平家軍は大敗を喫することとなった。

## 【第二部】

### 八 よみ人知らず

作詞 柳弥生 作曲 尾方蝶嘉

演奏 柳弥生

読み人知らずと言って、これほど有名な歌人はいないだろう。「平家物語」には百首ほどの和歌があるが、中でも、この平忠度が俊成に歌を託して都落ちしていくエピソードは、戦乱の中にあっても断ちがたい和歌や文化・芸術への思いというものを偲ばせる。

### 九 鴨越の逆落し

作詞・作曲 寺田蝶美

演奏 江田 結南

一ノ谷の合戦。都を追われた平家であったが再び勢いを盛り返そうとしていた。そこで源義経は奇襲を企てる。精鋭騎馬兵を率いて平家軍背後の山中へ分け入ると、鹿がようやく通るといふ獣道を進み、厳しい断崖を駆け下り平家の陣へと突入した。不意を突かれた平家軍は海へと敗走することとなった。

### 十 敦盛

作詞・作曲 寺田蝶美

演奏 横田 志穂里

源義経の鴨越えの奇襲もあり、平家の軍勢は海上の舟へと逃れていった。源氏の武将熊谷次郎直実は遅れて逃れていく一人の武将を大声で呼び戻し一戦交えようと意気込んだ。振り返り戻ってきた相手はまだ16歳の平敦盛であった。

### 十一 那須与一

詞「平家物語」より 作曲 寺田蝶美

演奏 鶴 陽満里

源平屋島の戦い。夕刻となり海上の平氏より一艘の船が近づいてきた。見ると女官が扇を

掲げている。源義経は弓の名手である那須与一に扇の的を射るように命じる。与一は鎗矢を番え引き絞りを放った。矢は見事扇の要際一寸ばかりのところに命中する。

### 十二 源平義経の弓流し

詞「平家物語」より 作曲 青山旭子

演奏 平田 優生

那須与一と並んで屋島の戦いの有名なエピソード。激しい合戦の最中、源義経は脇に抱えていた弓を誤って海に落としてしまう。源氏の郎党は弓をお見捨てなされ、と必死に止めるが、義経は源氏の大將の弓がこんな弱弓かと笑われては末代までの恥、と御曹司のブライドと命をかけて我が弓を取り戻しに行く。

### 十三 知盛と義経／壇ノ浦の合戦

演奏 尾方蝶嘉（筑前）・川嶋 信子（薩摩）

#### 〈知盛と義経〉

作詞・作曲 尾方蝶嘉・川嶋 信子

源平の命運を決する最後の戦いを前にした両軍の総大將・平知盛と源義経の心象を、知盛を尾方（筑前琵琶）、義経を川嶋（薩摩琵琶）が表現する。

#### 〈壇ノ浦の合戦〉

原詞 水木 洋子 原曲 鶴田 錦史

筑前編曲 青山旭子 潤色 川嶋 信子・尾方蝶嘉  
紅に揚羽の蝶の旗は平家、白地に黒の笹竜胆は源氏。海峡は紅白の旗に埋め尽くされ、関の声は打つ波のごとく寄せては返し、矢叫びは天にも届くばかり——日本中を騒乱に巻き込んだ源平の戦いも、元暦2年長門の国壇ノ浦にて、ついに決戦の時を迎える。

ナビゲーター 山口恭子（紅生姜）・西村恵好